14

(二) アイヌの昔話「父親殺し」の物語

この頃新聞を見ると、中学生が父親を殺害したとか、父親が高校生の息子を殺したなどという記事が目につく。かつてだと、このような尊属殺[1]しの事件は、相当大きい見出しがついていたが、最近はそれほどでもなくなったのは、事件が以前ほど珍しくないからだろう。ほんとうは実に大変なことなのに。

あるいは、「オヤジ狩り*」などという言葉もあって、少年たちが集団で自分たちの父親くらいの年輩の男性に襲いかかる、ということもある。別に何の理由もあるわけでもないのに、「オヤジ」と見なされる人に理不尽な攻撃を加える。実に嘆かわしいことである。

父・息子の葛藤は欧米では日本よりもっと強い。統計的にしらべたことはないが、アメリカでの父と息子間の殺人事件は、おそらく日本をはるかに上まわることだろう。

ところで、父・息子の関係ということになると、フロイトの提唱したエディプスコンプレックス[2]のことを想起する人も多いであろう。ギリシャ悲劇「エディプス王[3]」の話では、エディプスは自分がそれとまったく知らないうちに、父親を殺し、母親と結婚する。これは大変な悲劇である。フロイトはこの話を用いて、男の子は生まれたときより母親に性愛を感じ、そのために邪魔者である父親を亡きものにしたい

注1 尊属
父母、祖父母など自分より前の世代に属する血族。

問1 「オヤジ狩り」が生まれる背景は、どのようなものが考えられるか。

問2 「父・息子の葛藤は欧米では日本よりもっと強い」とあるが、それについてどう思うか。

注2 エディプスコンプレックス
(Oedipus complex)
男の子が無意識のうちに父を恨み、母を性的に思慕する傾向。ギリシャ神話のエディプス王にちなんでフロイトが名付けた。

という願望を無意識的にもっている、と考えた。しかし、それは実行するのは恐ろしく大変な不安を伴う。男の子はそれは実現不能と知り、現実との折り合いをつけ、父親とも親しい関係になる。しかし、無意識内にはエディプスコンプレックスが存在し続け、成人になってからもその人間の行動に影響を与える。

以上がフロイトの考えであるが、その後、文化人類学者の研究によって、異なる文化によっては、父・息子の葛藤はそれほど強くなく、エディプスコンプレックスも存在しない、と主張されるようになった。*

ところで、最近アイヌの昔話を読んでいたら、「父親殺し」の話があって、大いに興味を惹かれた。[4] そのひとつは、娘と父親（養父）の物語である。実はこの村に病気が流行し、全員が死に絶えそうになったとき、ある母親が神々に祈って、この子を育てて欲しいと願う。それを聞いて、ある神が人間になって彼女を育ててきた。それが父親なのだが、困ったことに彼は「人食い」で低い地位にある神だとのこと。彼は成人した娘を食いたくなって困る。詳しいことは省略するが、彼女は「人食い」の父親を小屋に閉じこめ、それに火をつけて焼き殺してしまう。何とも凄まじいことだが、これが悲劇にならぬところが、アイヌの話の特徴である。

娘の夢に人食いの父親が立派な服を着て現れ、「お前のおかげで、自分は人食いの罪を犯すのを免れ、位の高い神に生まれ変わった」と感謝する。後はこの神が娘の

注3 エディプス王
ソフォクレス作。紀元前四三〇～四二〇年ころの作。

問3 ここでいう「フロイトの考え」とは何か。

注4 アイヌ
（aynu「人」の意）主として北海道樺太に住んでいる種族。

守護神になって、娘は幸福に暮らす。

娘が父親を焼き殺したりするのに、*結果は悲劇にならない。これはどうしてだろう。それは、この他のアイヌの昔話を読み、アイヌの人たちの生き方について知ると納得できる。それは、アイヌにおいては、人間と自然、神との間や、生と死、などの境目がきつくなく、すべてがつながり循環して全体性を保っているという事実による。娘が養父を焼き殺しても、それはむしろ「火」による浄化であり、父は生まれ変わって幸福になるのだ。

子どもは親を乗り越えて成長していくのだから、何らかの方法で象徴的に「母親殺し」、「父親殺し」をやらなくてはならない。それがうまく行われると、アイヌの話で、殺された父親が守護神になるように、新しいよい関係が生まれてくる。自然の知恵から切り離され、「父親殺し」の物語など忘れてしまった現代人は、象徴的にではなく実際的に父親を殺してしまうような生き方をするようになった。このあたりで少し「物語」の価値を見直してはどうだろう。

問4「結果」が「悲劇」にならないアイヌ社会とは、どのような社会か。